# 漢詩神奈川

第　17　号

神奈川県漢詩連盟
事務局

川崎市麻生区王禅寺西
2-19-3

TEL−FAX
044-965-4950

発行人　岡崎 満義
編集人　三村 公二

## 新体制で「10周年」を目指そう

神奈川県漢詩連盟会長　岡崎 満義

神漢連は二〇一四年十月から新体制で進むことになった。事務局長が桜庭慎吾さんから三村公二さんに変わり、新しい執行理事に飯島敏雄、川上修己、中島龍一、高津有二、三村公二、室橋幸子、吉岡昭夫のみなさん、新運営委員に池上一利、礒邉邦雄、喜多 基、瀧川智志、中島義和(柴田 洋さんはひきつづき)のみなさんがスクラムを組んでくれることになった。心強いことこの上ない。故・中山清前会長が始めた漢詩初心者入門講座から育ったいわば第二世代が、いよいよ実力を発揮してくれることになったのである。中山さんもむこうでニンマリされていることだろう。

また同時に上級シニアの漢詩実力者を「竹林舎」の舎友として執行理事会に助言をお願いしたり、輪読会、鑑賞会をリードしてもらうことにした。飯沼一之、酒井謙太郎、桜庭慎吾、城田六郎、住田笛雄、古田光子、玉井幸久のみなさんがその第一次メンバーである。

このような新体制のもと、二年後の神漢連創立十周年記念の行事を迎えることになる。「漢詩で遊ぶ」をモットーに、オープンマインドで、たとえば横浜市や神奈川新聞、FM横浜、有隣堂・・・などと手を組んで新しいイベントを作ってみたい。とかく漢詩界は内向きになりがちなので、もっと外向きになって、外の組織と共同で仕事をしたいものだ。さらに〝開かれた漢詩連盟〟となるために、みんなでチエを出しあいたい、と思っている。

## 神漢連の事務局長の退任にあたって

執行理事　桜庭 慎吾

平成二十六年十月一日をもって事務局長職を執行理事の三村公二さんにバトンタッチいたしました。田原健一初代事務局長の後を承け、三年間の在任期間ではありましたが会員各位のご支持を賜り、県連の構造の強化に微力を注ぐことが出来ました。会員並びに役員各位のご支持と連携のお蔭と心より感謝申し上げます。

今後は岡崎会長を支える体制として田原・水城両副会長及び三村新事務局長ほか各役員に対してご支持を賜わりますようお願い申し上げます。

退任にあたり蕪詩一首を草しました。

有感神奈川県連創立九周年　　在州

金港結盟垂九年　金港に盟を結び　九年に垂とす
研鑽鷗鷺賦詩新　研鑽の鴎鷺　詩を賦して新たなり
吟心啓發存何物　吟心の啓発に何物か存す
薫育後生斯道伸　後生を薫育すれば斯道伸びん

転句は杜甫の「解悶」の七絶の「陶冶性霊存底物」―性霊(精神)を陶冶する底(なに)物か存す―からもらいました。即ち詩を作ることは心神(こころ)を啓発するうえで何物か(尊いもの)がある。この気持をもって後生の薫育にあたれば斯の(漢詩の)道はますます伸展してゆくであろう。退任にあたっていさか気持を述べさせて戴きました。有難うございました。

## 神漢連事務局長就任にあたって

執行理事　三村 公二

平成二十六年五月の総会を迎えるにあたって、七人の新任執行理事の中から新事務局長候補を選ぶようにと言われ、サポートするからという他の六人の後押しがあって十月一日より事務局長に就任した。

漢詩の世界にあっては文武両道が事務局長に不可欠の要件であるというのが私の基本認識であるが、そのどちらも不十分な私が大役を無事務められるかどうかいささか不安である。しかし、俵に足がかかってから強いのが私の持ち味だから、諸先輩方のお力をお借りして、会員の皆様方の信任が得られるよう謙虚に頑張れば、例え若造であっても、どちらも何とかなるだろうと今は楽観的に考えるようにしている。

今後は、前事務局長の敷かれた路線に沿って、仕事の役割分担をより明確にした組織運営を心がけていきたいと考えておりますので、会員の皆様方のご支援・ご協力をよろしくお願い申し上げます。

## 新体制の重点実施課題

一、執行理事の役割分担を明確にし、組織的運営を心がける。(以下敬称略)

・総務・企画グループ
　(会員管理、総会、理事会)
　リーダー　室橋幸子
　サブ　吉岡昭夫
・教育グループ(入門講座・研修会等)
　リーダー　中島龍一
・事業グループ(バトル甲子園、吟行会等)
　リーダー　高津有二
・会報グループ(漢詩神奈川編集・発行)
　リーダー　川上修己
・HPグループ(ホームページ編集)
　リーダー　三上光敏
　サブ　飯島敏雄
・経理グループ(予算・決算)
　リーダー　吉岡昭夫

二、詩力が高く、漢詩に造詣が深い上級シニア会員の皆様方からなる「竹林舎」を新設し、執行部隊への助言と若い会員の教育を自由な立場から適宜実施していただく。

・舎友(アイウエオ順)
　飯沼一之、酒井謙太郎、桜庭慎吾、城田六郎、住田笛雄、玉井幸久、古田光子
　(執行理事窓口は田原副会長／三村事務局長)
・既に実施していただいている事項
　大簡会(佩文齋詠物詩選)
　リーダー　酒井謙太郎
　漢詩鑑賞会A　講師　玉井幸久
　漢詩鑑賞会B　講師　住田笛雄
・今後期待したい催し(案)
　佩文齋七絶抄勉強会
　城田六郎、飯沼一之
　女性会員活性化委員会サポート
　古田光子(左記参照)
　杜甫を読む会　桜庭慎吾

三、最近増え続けている女性会員の定着化を促進する為に「女性会員活性化委員会」を新設する。

・委員長　水城まゆみ
・副委員長　室橋幸子
・古田光子舎友

のご指導を得て、実施内容は検討中。二月三日に近代文学館で第一回予定

# 東京都・神奈川県漢詩連盟合同吟行会　開催

## 真鶴半島　石川先生詩碑見学
## 岳堂先生詩碑前で高らかに朗吟！

秋晴れの昨年十月三十日、真鶴半島のお林展望公園の石川岳堂先生の詩碑「真鶴岸頭書懐」の前で東京都・神奈川県漢詩連盟合同吟行会が開催され、全漢連からの参加者を加えて総勢五十九名が参加した。石川先生から玉詩の解説と中国語による朗読の後、岳精会会員を中心に吟詠があり、吟声は朗々と海面遠くまで響き渡り、まさに「清吟相和両連盟」（吉岡氏の柏梁体より）であった。

その後「岩忠」に場所を移して懇親会が開催され、恒例の柏梁体の披露が行われた。今回は石川、窪寺両先生から別々の韻が提示されたが、窪寺先生がご都合で欠席されたため、代理で河野光世先生に審査に加わって頂き、全体の優秀作について石川先生から発表、講評が行われた。

会場から窓越しに見える「岩海岸」の絶景と新鮮魚の舟盛り料理に舌鼓を打ちながら三時間が瞬く間に過ぎてお開きとなった。

### 柏梁体　石川先生の韻（庚・青）

時系列順

巖頭松下詩碑成　水城まゆみ
英雄事業松下汀　中野　三琴
真鶴詩碑千載榮　三村　公二
巖頭感得詩碑精　秋吉　邦雄
曠士壯懷擧詩名　住田　笛雄
曠士騒人似菊英　淺岡　清明
騒人雅興終不停　石川　忠久
曠懷千載滿一庭　河野　光世
岳堂詩碑座右銘　飯島　敏雄
先生書懷傾耳聴　石川　晏子
清吟相和兩連盟　吉岡　昭夫
吟聲朗朗入青冥　古田　光子
二松謖謖碧瀾平　喜多　　基
松籟神韻海氣晴　山崎　重彦
巖頭樹下啼鳥聲　大森　冽子
深醉風光猶未醒　酒井謙太郎
翁媼相逢入眼青　田原　健一
好日晴天通至誠　高津　有二
萬里瀛海促詩情　田中　和子
淼淼相灘壯懷生　櫻庭　慎吾
清波碧海白雲横　山田　　治
清波巖頭照眼明　室橋　幸子
秋晴碧水白鷗鳴　長岡　巨知
秋光千里真鶴迎　家吉　幸二
天晴海青美景京　岩橋　伸泰
秋光波靜一航行　前嶋　彩江
巖頭望島歩歩軽　窪田　都香
公園蕗葉露珠傾　関谷　　則
秋林森邃歳月更　志村　典子
相集詩豪綺席清　江坂　久子

### 柏梁体　窪寺先生の韻（先・真）

茫茫滄海籠淡煙　小室　陽子
東瀛萬里檣一千　岡田　泰男
萬里馳思三石濱　横山　真吾
天外飛鳶幾回旋　三上　光敏
鴻儒詩碑危崖邊　松井　秀人
揮筆先生意自新　永野　　澄
甲午新碑有餘妍　柴田　　洋
參來鷗鷺石碑前　二戸　邦子
吟行六十盟友親　瀧川　智志
碑前信歩騒人巡　更田　金蔵
金風岩頭拈句専　保田　昌男
青波翻處聳吟肩　三浦　哲郎
碑前案句獨求珍　池上　一利
作詩推敲物外身　川上　修巳
巖頭高歌思先春　吉池　啓子
碑前吟詠李杜賓　久川憲四郎
二松樹下吟心傳　礒邉　邦雄
二松一櫻摩旻天　玉井　幸久
倚碑遙望白帆船　丹下　和幸
湘南好景屬騒人　高山　一雄
此地棲遲不知貧　中山　正道
以上

【吟社の活動報告】

# 九吟社・さまざまな活動で日々研鑽中

## 平成二六年度新人研修会・八起会発足
## 八期生（八起会）活動開始しました

幹事代表　中島 義和

今年度の神奈川県漢詩連盟の漢詩入門講座が七月に終了し、三十三名の受講生のうち二十一名が八期生の会を立ち上げました。第一回は十一月二十日（木）にスタートし以降奇数月の第三木曜に開催します。名付けて八起会（詩作に苦悶し七転しても八倒でなく最後には八起きするという願いを込めて？の命名）。会員構成は女性六名男性十五名、年齢は傘寿近くから而立前まで幅広く（といってもただ一人の二十代女性以外は皆熟年男女）。

メンバーの中には漢詩や詩吟の経験者、中国語の熟達者で詩稿を中国音で読み上げた方、書道の達人で自作の漢詩を書にして展示会を計画している方等々多士多才の様相ですが、一方で多くのメンバーが（小生を含め）全く初めて漢詩に挑戦し今後も詩作を続けようという仲間たちです。先輩の皆さんのアドバイスを受けながら楽しい会に育っていくことを願っています。

## 「金星会」漢詩入門講座第一期生

三上 光敏

「金星会」は平成十九年卒業した一期生主体の吟社、現在 実活動メンバーは六名になった。平成十九年十二月発足当時十九名だったが、少々寂しい。

講師は岡崎満義会長。例会は県民活動サポートセンター、隔月 奇数月の木曜日又は火曜日に開催。三時間の例会の後は横浜駅地下のビアホールが定番。例会五〇回記念には「記念誌」作成を密かに考え始めている。

## 「三水会」漢詩入門講座第二期生

中島 龍一

古田光子先生の指導で、十四名が奇数月の第三水曜日に勉強会を行っています。

今年、新しく本宮陽子さんが入会され一段と賑やかになりました。会場は部屋が狭いのが難点ですが、かえって熱気が生じて議論が活発になりいつも時間が足りないくらいです。懇親会になると、詩評がまた一段と本音の議論となって楽しくなります。酒と詩はセットになると楽しみが増すようです。

## 「好文会」漢詩入門講座第三期生

高津 有二

### 『好文会詩集の発行』

神漢連第三回新人研修の仲間の好文会は、平成二十一年発足から五周年を記念して「好文会詩集」を発行した。各会員がこれまでの自分の詩の中から十首を選んだ。最初のころの詩も自分史の記録としてそのまま載せた人、余りに拙いので推敲した人、それぞれであった。今回は、会員全員の協力ですべてを手作りで作成したのが特長である。岡崎会長、城田、桜庭、三村の各先生から祝詞、賀詩を頂き、衷心より御礼を申し上げたい。

## 「詩游会」漢詩入門講座第四期生

板本 健作

### 『詩游会箱根吟行』

昨年は、中秋の明月を求め、山形の上山温泉『名月荘』に行き、今年は、総勢十七名で新緑の箱根仙石原に行って来た。箱根の風景に因み、三体詩から『山』の漢詩六首、宋詩から『湖』の漢詩七首を選び、ホテルで勉強会を行った。

五月二十六日『ホテル花月園』で早速『山』の漢詩の勉強を開始した。温泉に浸かり、豪華晩餐の後は、詩吟に歌曲に話芸にと多芸が披露され、深夜まで美酒と歓談は、尽きなかった。

翌日『湖』の漢詩の勉強をし、昼食後解散。しかし多くは、桃源台より海賊船で芦ノ湖を遊覧した。重なり合う青嶂、雲間から望む霊峰富士、湖面を渡る初夏の風は爽やかだった。

元箱根から小涌園までバスで移動し、岡田美術館に寄る。六十六年振りに公開された、喜多川歌麿の肉筆最高傑作といわれる『深川の雪』を鑑賞して帰途についた。

## 「五友会」漢詩入門講座第五期生　飯島　敏雄

五友会は初心者講座五回生の会で、会員九名で偶数月の第一木曜日に石川町駅近くの神奈川労働プラザで十四時から十六時まで例会を開いています。会員の中の中野三琴さんは煎茶のお師匠さんで、年二回ほどは鎌倉にある中野さんの茶室、「明月庵」で陶淵明、蘇軾、王羲之などを茶話にして煎茶を啜らせていただいた後に別室で例会を開いています。

今年は五友会も結成して三周年になりますのでこれまでの詩を詩集にしたいと計画しています。

## 「以文会」漢詩入門講座第六期生　柴田　洋

### 『以文会詩集』

以文会の誕生三年目を迎え、詩集の作成に取り組んでいる。些かたじろいだが、初期段階の作品として編集する事も後々の参考になると思い決断した。発足当時に前事務局長の桜庭慎吾先生の「詩集纏めの大切さ」のご指南を頂いていた事も意志を加速させた。

日程は三月をめどに発刊を予定している。十四名で一人六首限定にしているのが、少しく難点である。

## 「七歩会」漢詩入門講座第七期生　喜多　基

### 『横浜公園ミニ吟行会』

真鶴吟行会の予行演習として、七歩会の九月例会でミニ吟行会を催しました。水城先生の柏梁体についての講義の後、尤韻一字が印刷された短冊を手に日本庭園を散策しながら句作に取り組みました。爽やかな風が流れ、木々で蝉が鳴き、池には亀達が日の光を浴びておりました。

半時後、かながわ労働プラザに席を移して全員の句の検討会を行いました。会員から九句が提出されて、「意外に簡単だった！」が会員の皆さんの感想でした。風雅の心を学ぶ有意義なミニ吟行会になりましたことを報告いたします。

## 「岳精会」　礒邉　邦雄

漢詩サークル「岳精会」の母体は、吟社「岳精流日本吟院」。発足一年目の昨年は、全員自詠自吟で漢詩作りに慣れる事に努めた。二年目の特筆すべきことは、吟社発行の会報『龍吟』に会員が漢詩を投稿。一～三回迄は一名、四回目に二名投稿。会報の『龍吟』は北海道から沖縄迄の詩吟の会員の目に触れる。

作詩のレベルを上げていかないとご指導して頂いている城田・三村両先生に申し訳が立たない。又、昨年から続けている八月と十二月に行っている勉強会後の中華料理店を貸し切り状態にしての自詠自吟の発表は今後も続けていきたいと考えている。

連盟恒例

# 秋の研修会開催

研修会の第一グループは平成二十六年十月七日、第二グループは十月十五日、第三グループは十月二十二日にそれぞれ行われた。提出詩は合わせて四十九首であった。

## 高得点者の紹介

### 第一グループ

新秋夜坐　　秋吉　邦雄

嫩涼孤枕睡難成　嫩涼孤枕睡り成り難く
起坐繙書垂五更　起坐書を繙けば五更に垂とす
寂寂西窗仰霄漢　寂寂たる西窓霄漢を仰げば
一痕残月引愁清　一痕の残月愁いを引いて清し

**「漢詩ーこの難しくて面白い道」**

漢詩作りを始めて漸く二年半。稚拙でも分かり易くを心がけてきた積りであるが、さて如何なものだったか。時に岡崎会長が賞としてポケットマネーで下さるワインに励まされ、また諸先生方の親身のご指導に少しでもお応えしたいとの思いもあり、何とかここまで来られたとの感慨一入である。

確かに漢詩の世界は広く奥深い。それ故精進の道も長く遠い。が、駑馬十駕と云う。今後とも自らを鞭打ちつつ、この難しくて面白い道を少しでも前進したいものである。

### 第二グループ

彷他郷憐渓蟹　　芝　公男

豪雨川流濫四方　豪雨　川流　四方に濫る
市街渓蟹在孤彷　市街　渓蟹　孤り彷ふ在り
見危借問往何處　危きを見て　借問す何処へ往くと
涙答願歸山峡郷　涙して答ふ　願はくば山峡の郷に帰らむと

以前豪雨の後、歩道を必死で横切る沢蟹を目にし、詠んだ短歌「何処から流され来しか沢蟹の豪雨の後の舗道で彷徨ふ」を元に、災害や戦乱で故郷を追われた人達への想いを寓意に含め漢詩にしました。この趣旨を酌んで評価を頂いた方もあり、大変嬉しく思いました。

私の実家のありました山村は嘗て山津波で全村が流されました。自身も戦争で生まれ故郷を追われ、デラシネは人生の原点であり、その気持を多少なりとも表現することが出来たと感じています。

高校の頃より漢詩は好きでしたが自分で作ることは思いもよらないことでした。神奈川新聞の毎月第一日曜日に岡崎満義会長の漢詩が掲載されており、ソチの冬季五輪、原発事故など内容の斬新さに魅せられ、「漢詩でこんなことも詠めるのだ、自分も挑戦してみよう」と当連盟の講座を受講しました。同期の方々の八起会も発足し、切磋琢磨出来る機会を得て、今は「詞酒其樂也融融」の心境です。

### 第三グループ

西窓殘月　　板本　健作

西窓獨坐曉風清　西窓独坐し　暁風清し
天外無雲殘月傾　天外雲無く　残月傾く
一別音容千里隔　一別音容　千里隔たり
通宵不睡憶君情　通宵睡れず君を憶うの情

この詩は、湯島聖堂斯文会の漢詩作法入門講座の課題詩です。月の名前四百語が書かれている『月の名前』という本に「残月・有明月」について「夜が明けても西の空に残っている月。平安時代、一夜をともにした男女が後朝の別れのときに見る月であるとともに空しく恋人を待った女が眺める月でもあった」と書かれていた。この話を基にこの詩を作ってみました。「天外無雲」は、昨年山形で見た中秋の明月が雲一つ無かったのでそう詠じ、「一別音容」は、白居易の長恨歌の「一別音容兩渺茫」から取りました。漢詩創作は難しく、空しく残月を眺める心境です。

# 入賞おめでとうございます

## 平成二十六年度 全日本漢詩大会宮城大会 扶桑風韻　特別第十二号

### 【宮城県知事賞】

學童渡船　　上野　裕人

蒼波瀲灩雪初晴　蒼波瀲灩として雪初めて晴れ
野渡迎童短艇輕　野渡　童を迎へて　短艇軽し
修復學堂師弟喜　学堂を修復するは師弟の喜び
随風滿郭唱歌聲　風に随ひて郭に満つる唱歌の声

### 【宮城県教育委員会教育長賞】

旅宿朝　　中島　龍一

凄凄斜月對疎林　凄々たる斜月　疎林に対し
枕上鷄聲破曉陰　枕上の鶏声　暁陰を破る
料得溪流夜來凍　料り得たり渓流　夜来凍る
今朝不聽水車音　今朝聴かず　水車の音

### 【河北新報社賞】

一本松　　高津　有二

瑤林瓊樹絶無蹤　瑤林　瓊樹　絶えて蹤無くも
滄海沙汀昔日容　滄海　沙汀　昔日の容
晩浦漁舟維纜處　晩浦　漁舟　纜を維ぐ処
長投夕影凛孤松　長く夕影を投じ　孤松凛たり

### 【東北放送賞】

福島縣廣野町産米　　飯沼　一之

憑聖旨見搬皇居
災餘三歳活田園　災余三歳　田園活り
新米一苞臻禁門　新米一苞　禁門に臻る
炊爨飯香和御膳　炊爨の飯香　御膳和らぎ
龍顔莞爾午窓溫　竜顔莞爾　午窓温かなり

### 【宮城県漢詩連盟会長賞】

不爲雨讀　　岡田　泰男

酣眠不許惡鷄鳴　酣眠許さず　鶏鳴を悪み
困憊田翁顰一聲　困憊の田翁　一声に顰む
已矣消亡夜來雨　已矣　消亡す夜来の雨
曙光照钁促春耕　曙光　钁を照らして春耕を促す

## 諸橋轍次博士記念漢詩大会(第六号)

### 【最優秀賞・諸橋轍次賞】

雛孫懲羹吹膾　　岡田　泰男

老妻煮粥火蒸餘　老妻が粥を煮る　火蒸の余り
兒恐熱傷餐自徐　児は熱傷を恐れて　餐　自ずから徐なり
請看著匙吹冷飯　請う看よ　匙に著く　冷飯を吹くを
阿翁笑謂是何如　阿翁　笑みて謂う　是れ何如と

### 【優秀賞・三条市長賞】

曉聽杜鵑　　古田　光子

寥寥假寓寄殘生　寥々仮寓　残生を寄す
災後三年轉愴情　災後　三年　転　情を愴ましむ
獨夜思鄉天欲白　独夜　郷を思えば　天　白まんと欲す
空聞蜀鳥促歸聲　空しく聞く　蜀鳥　帰るを促す声

### 【奨励賞・BSN新潟放送賞】

城市徜徉　　岡崎　勝郎

十字街頭佇又行　十字　街頭　佇み又行く
疲時興盡止吹笙　時に疲れ　興尽きたれば　吹笙も止む
適歸欲與忘憂物　適に帰って與らんと欲す　忘憂物に
未晦杯觴聊復生　未だ晦からざるに杯觴　聊か生を復したり

## 全国ふるさと漢詩コンテスト

主催／多久市　多久市教育委員会

### 【優秀賞】

丘上看雲　　古田　光子

原頭日暖曳藜杖　原頭日暖かく　藜杖を曳く
丘上風輕坐草茵　丘上風軽く　草茵に坐す
漫看白雲舒卷態　漫ろに看る白雲舒巻の態
天空興趣屬閑人　天空の興趣は閑人に属す

### 【入選】

幽莊偶成　　小嶋　明紀子

幽莊寂寂遠人寰　幽荘寂寂として人寰遠く
小徑停筇半日閑　小径筇を停むれば半日閑なり
任爾紫門無友到　任爾紫門友の到る無きを
孤雲隨我老松間　孤雲我に随ふ老松の間

## 「金港雪朝」でバトル漢詩甲子園！

担当　高津 有二

第三回バトル漢詩甲子園は、来る三月六日(金)神奈川近代文学館で開催されます。今回は窪寺先生から頂いた「金港雪朝」の詩題で九サークルが闘いを繰り広げることになっています。また、初めての試みとしてサークル会員全員が最も良いと思う作品に事前に投票し、一般会員の方には当日会場で投票してもらうことを予定しています。更に自詠、自吟、自書という究極の目標に向かって、本年も詩吟の朗詠、揮毫の展示も行いますので、一般会員の方々も多数ご参加頂きますようお願い致します。

現在準備進行中です。詳細は最終ページをご覧ください。多くの方々の参加を期待しております。

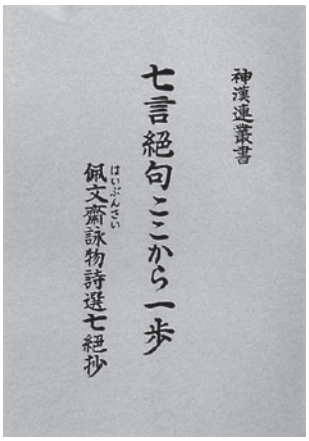
## 佩文齋詠物詩選七絶抄ついに刊行

編集担当　城田 六郎

神漢連有志が輪読会のテキストとして用いているのは、清朝康熙帝の編纂した尨大な詠物詩の中から、江戸の漢詩人館柳湾が抄出した袖珍本第一篇です。この篇には、詩題により百五十項目に分類し、唐・宋・金・元・明にわたる古詩、律詩、五絶、七絶二千三百二十首を採録している。このうちの七絶六百六十首、詩人の数三百三十一人を抄出したものが今回の刊行本です。

七絶抄の特色の第一は、詩を韻別に配列し、読者の作詩に利便を図ったことです。

特色の第二は、月、日、雲、雨等の自然現象や春夏秋冬の四季等の項目毎に索引を作成したことです。索引には、項目、詩題、詩人名、時代区分、韻、掲載頁の順に配列されています。是非これを一冊お手許に置かれて、詩作に活用していただきたいと思います。




神漢連叢書
七言絶句ここから一歩
佩文齋詠物詩選七絶抄
平成27年1月発行／1,000円

## ホームページに新企画登場「フォト&漢詩」

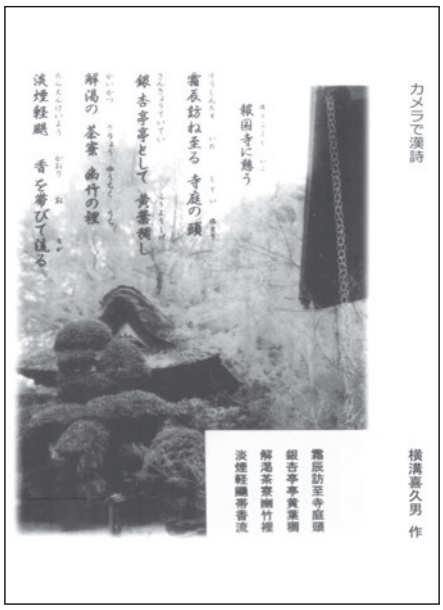
HP担当　三上 光敏

最近、インターネットやTVで「写真俳句」の作品をみた。言葉通り、写真と俳句の組合せで感情や印象などを表現するもので両者のコラボレーションに大変興味を感じた。過日、岡崎会長から「金港こんにゃく問答」で提案のあったこの「写真漢詩」というのも面白い企画になるとアイディアをいただいた。原則は「自作の写真を使い自作の漢詩をつけて一体化して表現とすること」だが、他者の写真であってもまた他者の漢詩でも或いは両方とも他者の作品でも成立しそうだ。

昔から絵画をみてその印象などを基に漢詩を作る世界が存在した。例えば頼山陽の「題不識庵撃機山圖」や梁川星巌「常盤抱孤圖」などよく知られた詩だ。なお、漢詩に比べ歴史の浅い写真(高々三百年余)ではあるが、写真から得られるリアリティは極めて高い説得力があり漢詩とは面白いコラボになるのではと期待する。先ずは第一歩を踏み出すことが大切。

どなたか一度挑戦してみませんか。発表の場は勿論、神漢連ホームページです。

右の「カメラで漢詩」は横溝喜久男会員の鎌倉報国寺を訪ねたときの写真と漢詩です。



## 『詩集を片手に、鎌倉を漫歩しよう！』

副会長　田原 健一

先月、礒野衛孝さんから「鎌倉漫歩詩草」を頂いたのだが、此れがなんとも楽しい立派な詩集ですので、ご紹介します。

まず〔鎌倉八景〕で以て、我々にも馴染みの景色を詠われ、〔鎌倉詠史三十韻〕では、鎌倉幕府ゆかりの人物三十人について、また〔鎌倉景勝百選〕では名所旧跡の百の場所について紹介されています。後には、源氏北条氏の系図やその百景の場所の地図までも載っています。

漢詩による鎌倉ガイドブックの感がします。この詩集を片手に、さらに昔に思いを致し、武家の都をみて欲しいというのが作者の気持ちでしょう。まさしく鎌倉漫歩お誘いの詩集です。

内容は濃く、礒野さんの長年のご勉強と力量が判る素晴らしい詩集です。肩がこらずに楽に読めて楽しい本に思えるのは、吟行会その他で我々にも馴染みの古都の名所が随所にでてくるせいでしょうか。それでも小生も未だ行ってないところが沢山ありました。この本を持って観光がてら勉強がてら出かけてみようと思います。

礒野さんは、この神奈川県連の創立当時からの役員で、洒脱で飾らないご性格でもって、ここ八年間随分と連盟発展の為ご尽力頂きました。近年視力低下の為、静養隠棲されていましたが、こんな本をお出しになるほどに快復されて何よりです。

鎌倉に移りすんで四十年、漢詩を鎌倉に根付かせんと、その普及への情熱がひたひたと伝わってくる礒野さん長年の作品の集大成です。一読をお勧めします。

詩集ご希望の方は、事務局へご一報下さい。実費で頒布いたします。

## 「鎌倉漫歩詩草」刊行によせて

礒野 衛孝

中年から始めた漢詩で鎌倉の風景を詠じることが楽しくなり作り続けた撫詩ですが、図らずも田原副会長から過分なお言葉を頂き恐縮しております。この詩草は鎌倉でお世話になり漢詩で色々ご厚誼を賜りました方々に読んで頂きたく作りました私家版でありますが、神漢連のお計らいで広く会員の方々に読んで頂ければ望外の喜びであり、五〇部を寄贈させて頂きます。日頃神漢連の積極的な活動には敬意を表しており、会員の増加、延いては始めて漢詩に接する方にも目を留めて頂ければ幸いにぞんじます。

# 会員便り

## 沢庵和尚と紫衣事件

岡崎 勝郎

先ごろ山形県上山温泉に数日浸かった。一面雪景色の一月である。幸いに好天で市内観光図を手に処方を歩いた。旧武家屋敷の小路、藩校の跡、上ノ山城（ただし昭和の建造）、そして沢庵和尚の春雨庵。

『寛永六年大徳寺一五三住持澤庵和尚紫衣事件にからみ上ノ山に流謫、藩主土岐頼行の庇護のもと此の春雨庵に三年居す』門前の顕碑に興味が湧き、帰って早々人歴を調査。

但馬（兵庫）出石の生まれで天正十年十歳にして出家、庭掃きから仏典の書写誦唄。この歳から世外の身である。明智光秀が信長を本能寺に弑した年である。没年は正保二年の七十三歳。徳川三代家光の代。じつに戦国乱世から江戸幕府が固まる迄の生涯。

紫衣事件とは元和元年家康の布令で僧侶の位階昇進の沙汰は総て皇室から幕府へ移すとの通告に端を発する。沢庵が大徳寺の住持になって六年目のこと。

家康に扈従する金地院崇伝なる僧がいて、住持の皇室勅許権をもつ大徳寺と妙心寺をかねてから目の仇にして、二寺は石田三成の残

党を今猶匿まっているとの讒言を憚らなった。沢庵は布告を半ばは無視し半ばは隠忍して十三年を耐えた。徳川二代秀忠の寛永四年、突如江戸から大徳・妙心の二寺に更に厳酷な示達が降った。

(一)五山衆の紫衣黄衣は将軍の公帖を有せざれば元和以前を除きこの期後を許さず。

(二)各寺院の伝奏はかの元和の令に違うと許さず必ず増上寺と知恩院を経由すべし。

(三)大徳・妙心の二寺は「参禅修行三十年、千七百則活頭を了畢の上」令を経て入院の事。

この厳令で大徳寺で許された紫衣の僧十数名のうち七割が着衣を剥奪された。衆僧達は大徳第二の大危機と戦慄した。二十八年前千利休がこの寺の山門に己が木像を飾った。ときの住持古渓和尚は懐剣を衣の裡にして太閤秀吉に申し開きしたという。

憤然沢庵は幕府への抗議書を綴る。その文三千余語、辞句鋭くして法令を完膚なきまで反駁翻弄したものだった。しかも読み易さを考慮してかな混じりの文にしてである。上書は京都所司代板倉某を介して江戸へと達したが、幕僚達の神経を逆撫でしたのが、このかな混じり文だった。よくぞ我らを文盲扱いしたものぞと。翌寛永五年、沢庵五十六歳江戸から召喚が発せられた。彼と玉室と名のる二僧に。

江戸城本丸白書院、なみいる幕閣の面前で沢庵はさながら電光影裏斬春風が如くに熱血の弁を奮った。併し多勢に敵手の効もなく、自身は羽州上ノ山。玉室は奥州棚倉へ配流と決まった。これが紫衣事件である。

天分南北西鳧飛　何日舊栖同翼歸
聚散無常只如此　世情禽亦有樞機

下野太田原城下、二方への岐道で沢庵の同道の玉室へ別れの一偈を授けた。流謫の三年が明けて三代家光の断を以て赦免、江戸召還となる。

上山城を訪ねたとき筆者は沢庵が藩主土岐侯に政治の要諦を「上中下三字之説」を用い説いたとの事項を知った。老子の文辞を利用したものである(注)。

様々な方便を使って彼は柳生但馬守宗矩に剣と禅の「不動智」動かざれば全体が見える、を授け、彼の鼻を明かしてやろうとした伊達政宗には茶碗の瑕の擬えから政宗の我意のつよさの虚しきを諭した。

(注)老子六十一章　大國者下流天下交也大者宜可為下

## 詩游会会員 浜辺又八氏　陶芸サロン開催

### 「陶芸サロン遊熙会展」に寄せて

結晶釉の最高峰と言われる国宝「曜変天目茶碗」。その魅力に惹かれ、再現に挑んで二十五年になります。しかし、未だ道半ばです。

平成二十六年九月、平塚美術館で展覧会を致しました。詩友、数名、遠路お出で頂きました。大感謝です。その後の駅ビルでの懇親会は漢詩談義に大いに盛り上がり、散会いたしました。展覧会の方はどうだったのか、少し気になります。立ち寄るだろうと思い、駅前の居酒屋に一人、我々を待っていた方がいらっしゃったということも後日知りました。

(浜辺又八記)

■訃　報　松田 滋氏　ご逝去

神奈川県漢詩連盟の会員、松田滋氏が一昨年九月逝去されました。

ここに謹んで哀悼の意を表し、ご冥福を心よりお祈り申し上げます。

【平成26年神奈川県漢詩連盟総会講演】講演録

# 近代文人の漢詩

石川 忠久

（漢詩神奈川一六号の続き）

そこで今度は芥川の話になるが、芥川は、おもしろいことに漱石が死ぬ年に大学を出ている。彼はご承知のとおり昭和二年に自殺しますから、彼の人生はもっと短い。三十五歳で終わったんですね。しかし、彼は大学を卒業するころから文壇に登場して、それこそ華々しい登場をしたわけね。それは先生もお墨つきを与えたわけだ。「あんたみたいにやったら文壇はおまえさんのもとにひれ伏すよ」と、手紙でこういうようなことまで言っているわけでしょう。ですから、彼としてはそういう意識が強くあった。そこで足りないものは何かというと、先生のような漢詩が足りないことに気がついたわけです。

というのは、この芥川のころになりますと学生は日常的に漢詩を作るということは普通にやらない。例えば久米正雄は同級生です、高等学校も一緒ですけれども、久米正雄が漢詩をやったとは聞いたことがない。だから漢詩というものは特殊なことになりかけている。今日彼の作品は全部で三十二首しか残っていない。飛び飛びにしか作っていないが、おもしろいことに小説を一生懸命書いているときの方が漢詩が多いですね。あるいは意識的に漱石先生のまねをしようとしたのかな。漱石先生も小説を書いて俗了された心を漢詩でいやすと、俺もそろそろそのまねでもしてみようかと、こういうことではないかと思うんですね。そして彼も上海に行ったりなんかして見聞も広めておりますし、仲間の手紙の端にそういう詩を作って残している。

そこで作品をちょっと見ましょうね。永井荷風の話はちょっと後にします。

松江秋夕　　芥川龍之介

冷巷人稀暮月明　冷巷　人稀れにして暮月明らかなり
秋風蕭索滿空城　秋風　蕭索として空城に満つ
関山唯有寒砧急　関山　唯だ寒砧の急なる有り
搗破思郷萬里情　搗破す　思郷万里の情

「ショウコウ」というのは松江です。松江に親友がいたんですね。恒藤恭。最初の名前は恒藤ではなかったけど、一高で親友になった男なんですけど、恒藤恭に対してこの詩を作っている。

なかなか手なれていますよ、これ。寒々しい巷、人がほとんどいない、夕暮れの月が出てきた、秋風が寂しく吹いて　人気のない町に満ち満ちていると、こういうような情景描写をしている。「関山　唯だ寒砧の急なる有り」このあたりは唐詩のまねをしているんですけど、もうこのころ砧なんかほとんど打たなかったと思うけど、砧が聞こえてくると。「搗破す　思郷万里の情」その砧がカーンカーンと音がする。それによって故郷を思う気持ち、万里の気持ちが起こってくると、こういうことで、自分の、いわゆる本当の感懐というよりは、こういうような詩のまねをして作っているというような作品でありますけど、形としてはちゃんとできております。平仄も合っています。韻は「明」「城」「情」と庚韻ですから、これはそつなく作っているわけ。

ところが、次の作品を見ます。

春陰　　芥川龍之介

似雨非晴幽意加　雨に似て晴に非ず　幽意加わる
軽寒如水入窓紗　軽寒　水のごとく　窓紗に入る
室中永昼香煙冷　室中　永昼　香煙冷ややかに
簷角雲容簾影斜　簷角の雲容　簾影斜なり
静処有詩三碗酒　静処　詩有り　三碗の酒
閑時無夢一瓯茶　閑時　夢無く　一瓯の茶
春愁今日寄何処　春愁　今日　何れの処にか寄せん
古瓦楼頭数朶花　古瓦楼頭　数朶の花

七言律詩に挑戦したんですけど、これが本当に自分の感懐というより、そういう形を何とか一生懸命まねをしようと、そういうようなところですね。「雨に似て晴に非ず　幽意加わる」雨でもなければ晴れでもない。そこで何となく悲しい気持ちになる。「軽寒　水のごとく　窓紗に入る」薄ら寒さがすっと窓に入っ

てきた。「室中　永昼　香煙冷やかに　簷角の雲容　簾影斜なり」これなんかもなかなか言葉はおもしろいんですけれども、言っていることは何ということない、部屋の中は昼なのに「香煙冷やかに」というから香か何かたいているという設定になっているのかな。そして「簷角の雲容」窓の外には雲が見える。「簾影斜なり」これなんか詩語集か何かから持ってきてはめたという。「静処　詩有り　三碗の酒」うまい、ここは、なかなか。「古瓦楼頭　数朶の花」「閑時　夢無く　一瓯の茶」酒と茶を歌っている。これなんかはちゃんと三碗の酒、一瓯の茶といって対句の場合も悪くないが、厳密に言うと酒は杯というけど、あんまり碗とは言わない。しかし、その程度はどうということはない。「春愁　今日　何れの処にか寄せん　古瓦楼頭　数朶の花」このあたりはよい目で見るとおもしろい感覚かなとは思いますね。春愁ということでうたっているわけですけど、古い瓦の葺いた高殿のところに数朶の花が見えるという結末がおもしろくはあるな。

　ですから、彼はこういう形を勉強して、もしこれをずっと磨いていけば、あるいは少し物になるようなものが作れたかもしれませんけど、彼はそれほど熱中しなかったんですね。生涯に三十二首しか作っていないんですから、作らない時は全く作らないということで、この世代になりますと、漢詩はよくてこの程度ということですね。同級生で親友である久米正雄などには全くこういうことは見かけない。また菊池寛も同級生ですけど、菊池寛はちょっと年長です、『文藝春秋』を作った人でありますけど、漢詩の話は聞きませんな。

　それから彼らより少し先輩になる安倍能成とか阿部次郎とか小宮豊隆とか、これは大体明治十年代の生まれですけど、ドイツとかフランスの匂いがぷんぷんするけど、しかし、漢詩の匂いは全然しません。ですから、いわゆる大学、この連中は――連中と言っちゃ悪いな、この方々が（笑）大学に入ったころはちょうど明治三十年代の、さっき言ったこういう時代です。ですから富国強兵というような社会の風潮の中で欧米風の学問を身につけた超エリート、そういう立場でしょう。だから彼らには漢詩の匂いはほとんどしません。

　その中にあって芥川は、ちょっと後輩になりますけれども、こういう文人の世界に入った。文人の世界に入ったことによってお師匠さんである夏目漱石に近づこうと、こういう意識が働いたかな。しかし、悲しいかな、お師匠さんほどの根底がない。根底がないから続かなかったんですね。もしお師匠さんほどの根底があったら、おもしろい詩人になり得たと思うが、しかし、時代がそれを許さなかった。芥川がちょうど卒業した大正五年、大正六年にはすべての商業新聞から漢詩なんか消えたという、そういう時代に遭遇しておりますから、こういうようなことで、彼がもし五十歳まで生きたらどうだったかと考えますけど、しかし、もう既に時代が変わってきていますから。

　その次に中島敦になりますけれども、中島敦はもっと若い。明治四十二年生まれ。彼が学校に入って大学を出たのは昭和になってからですから、昭和十七年に三十三歳で死んじゃう。随分若いですね。戦争中ですけど。しかし、今、中学や高校の教科書に『人虎伝』のあれだとか必ず出ているでしょう。相当立派な仕事残していますね。彼も漢詩を残している。これがおもしろい。彼の漢詩は現在、三十七首残っている。

　中島敦は、ご承知のとおり漢学者の家に生まれている。おじいさんは中島撫山といって埼玉県のほうの有名な漢学者です。ですから、その点では正岡子規に似ている。正岡子規のように家庭の環境はよく似ているが、しかし、既に時代が違う。彼が生まれた明治四十二年というのは学校制度がもちろん整備されている。そして、いわゆる現代的な学校教育を受けているわけでしょう。ですから、もしおじいさんでも生きていて、その薫陶でも受ける機会があればともかく、もう既にとうに亡くなっている人ですからそういうこともない。また家庭環境だって、お父さんにそういうことを仕込まれたわけでもないし、したがって、ほとんど学校教育だけで身につけた漢学の素養、知識といったものしかなかったわけですね。しかし、それにもかかわらず彼がこの若い一生の間に三十数首でも漢詩を残したということは、これは特殊なことであります。というのは、やはり彼の意識の中で自分は漢学

者の家に生まれているということが強く意識されていると思いますね。ですから、今日残っている『李陵』とかああいうような歴史小説を書いたばねにもなっていると思いますね。彼は横浜の女学校に勤めた。今の何高校になるんですかね。横浜高女と書いてあるけれども、今も続いていると思いますけど、その横浜の漢文の先生ではなくて国語の先生として彼は勤めた。そのころの女学校にしろ中学校にしろ程度が高かったですから、大体教員は東大とかそういうのを出たのが半分ぐらいいました。ですから、今の高校なんかとは全然違いますけど、そういう中に入って、ある程度恵まれた環境にあったわけですね。自分の意識としては、やはり漢学者に生まれたということもあったと思いますが、そこでこういう題材を発見し、また日常生活で漢詩を作ってみようと、こういうことになったと思う。

しかし、この作品を見ますと、どうですか、「早春　利根川を下る　二首」。これは昭和十三年に作ったものです。昭和十三年は一九三八年、したがって、まだ三十歳にならない。彼は一九〇九年生まれですから三十歳にならない。利根川下りの作品でありますが、水の上に黄昏が来ている。雨が降りそうな空。春寒の中に病気を抱えて川を下る。これは彼は非常に死ぬきっかけにもなったぜんそく持ちだったですから、ぜんそくのことを言っているかもしれないが、これは詩人の無病呻吟に苦しんだのかもわからん。

「春寒に病を抱きて　長川を下る」葦とか菰とか、こういったものがまだ萌え出さない。鳧鴨も稀である。鴨も稀である。「中国で、いわゆる江南というイメージがありまして、その江南の川あるいは湖、こういったところで美しい船を浮かべて遊ぶ、そういうものとは全く違う」と、こういう言い方をしているわけ。

早春下利根川　二首　其一　　早春　利根川を下る　　中島　敦

水上黄昏欲雨天　水上の黄昏　雨ふらんと欲するの天
春寒抱病下長川　春寒に病を抱きて　長川を下る
菰荻未萌鳧鴨罕　菰荻未だ萌えず　鳧鴨罕なり
不似江南旧画船　江南の旧画船に似ず

其二

淼洋濁水廻長坡　淼洋たる濁水　長坡を廻り
薄暮扁舟客思多　薄暮の扁舟　客思多し
春寒料峭催冰雨　春寒料峭として　冰雨を催し
荻枯洲渚少游鵝　荻枯れたる洲渚　游鵝少なし

「「江南の旧画船に似ず」と言っている。これは題材がおもしろいと思う。題材が利根川を下るということでありますけど、最後の「江南の旧画船に似ず」という言い方によって、いわゆる船遊びを現代化しているようなところがありまして、題材がおもしろいかなと。しかし、平仄の具合がよくないですね。平仄の具合が悪い。第二句はよいが、第三句が悪い。「菰荻未だ萌えず　鳧鴨罕なり」また「不似江南旧画船」。しかし、これだと、例の拗体にもなっていないわけでしょう。だから、これは完全に平仄の具合が悪い。まだ技量的に絶句を十分に使いこなすところまでいっていない。

其二も平仄の具合がよくない。この二首は彼がまだ昭和十三年というと三十歳になっておりませんが、こういうようなまねをして、こういう世界に遊ぼうという、そういったようなところが見られるわけであります。

その次の詩のほうは、少し深刻というか、深い作品になっていますが、

無題　　無題　　中島　敦

韶光已遍柳糸長　韶光已に遍く　柳糸長し
四月庭除気正爽　四月の庭除　気　正に爽かなり
紅紫好薫風信子　紅紫　好薫の風信子
朱黄奪目鬱金香　朱黄　目を奪う　鬱金香
花英絢爛如濃抹　花英は絢爛として　濃抹の如く
嫩緑蒼蒼似淡粧　嫩緑は蒼々として　淡粧に似たり
誰謂此家無一物　誰か謂う　此の家　一物無しと
万金芬郁満茅堂　万金の芬郁　茅堂に満てり

「紅紫　好薫の風信子」これはヒヤシンスのこと。「朱黄　目を奪う　鬱金香」これはチューリップのこと。さてこれを見ますと、七言律詩の格好をしている。しかし、第二句をごらんなさい。第二句の韻は、これは平韻ではない、平字ではない。「爽」という字は仄字です。したがって、韻になっていないのね。韻を間

違えている。韻を間違えているというのは、これはちょっとよくないな。まだまだ未熟で、深刻な歌を歌おうとしているんですけれども、形の上でまだできていないというわけで、二つぐらい紹介して言っちゃ悪いんだけれども、中島敦の漢詩はまだまだものになっていないということですね。というのは彼の家は確かに漢学者の家でありますけれども、彼が育った時代は大正の末から昭和の初め。したがって、芥川とか、かなりその先の人たちとは全然違うということで、さしもの漢学者の末裔もまだ勉強が足りないということが言えるということですね。

ただ、今日まだ芥川や中島敦の研究は十分でない。これは既に本が出ていますけど、言っちゃ悪いけれども、この本を書いた人は、あまり漢学の知識がない。やはり漢文を勉強した専門家が見なくてはいけないと思いますね。この分野は国文学者に任せておけません。国文学者では無理ですね。今の国文学者は漢文をやりませんから、なおさらです。ですから、これから若い学徒が、漢文を勉強した学徒がこういうものを改めて取り上げて正当な評価をし、これがどういう位置にあるかということをもうちょっと詰めなければいけないと思いますね。

永井荷風は明治十二年生まれ。これは奇しくも大正天皇と同年です。大正天皇と同じ年。大正天皇は大正十五年に亡くなったけど、この人は昭和三十何年まで生きていた。八十歳まで生きていた人ですね。これは手練。なかなか手練。手練というのは褒めているんですよ。つまり彼のお父さんは永井禾原といって有名な漢詩人です。お母さんは鷲津毅堂の娘です。尾張一宮。尾張一宮といえば森春濤も尾張一宮ですけれども、その江戸の末期から明治にかけては名古屋近辺は非常にあれが高かった。たくさんの詩人が出ています。そのうちの主なものが森春濤と鷲津益斎、鷲津益斎の息子が鷲津毅堂です。鷲津毅堂の娘が永井禾原と結婚して永井荷風が生まれているわけ。だから血統的にはサラブレッドなんだけれども、しかし彼は親に反発した。そこで彼は慶応大学に行って、あとは漢学の世界からすっかり足を洗ってフランスの方になった。そこで結局、半端なんでありますが、この永井荷風の作品も今は三十三首しか残っていない。

墨上春遊　　永井荷風

黄昏転覚薄寒加　　黄昏転た覚ゆ薄寒の加わるを
載酒又過江上家　　酒を載せて又過ぐ江上の家
十里珠簾二分月　　十里の珠簾　二分の月
一湾春水満堤花　　一湾の春水　満堤の花

「黄昏転た覚ゆ薄寒の加わるを　酒を載せて又過ぐ江上の家　十里の珠簾　二分の月」しゃれているぞ。「一湾の春水　満堤の花」。これ、しゃれ過ぎている。うまいもんだな。手練だな。この作品なんか見たら清朝の嘉道の風。嘉慶・道光、嘉道の風。嘉慶という年号がある。道光という年号がある。嘉道。十九世紀の初め、半ばごろまで嘉道の風。その前が乾嘉の風といった。乾隆・嘉慶で乾嘉の風、そして嘉慶・道光で嘉道の風というんですね。こういう詩です。しゃれた味の、非常に滑らかな味。これはそっくりというか、よく勉強している。だれでもこういうのを作るので特殊な個性というのはないですね。言葉のあやがおもしろい。「十里の珠簾　二分の月」これなんかもちゃんと押さえている。

上帰航日　　帰航に上る日
愁然有作　　愁然として作る有り

永井荷風

画舫清宵載酒行　　画舫清宵　酒を載せて行く
幾旬無頼滞江城　　幾旬無頼　江城に滞る
可憐今日申江水　　憐む可し　今日の申江水
送我又為嗚咽声　　我を送りてまた嗚咽の声を為す

永井荷風は中国旅行をしているんですね。もっとも芥川もしていますけど、先ほどご紹介した詩には中国の影響があるわけではない。申江というのは黄浦江のことです、上海を流れる。上海に川が流れているでしょう。黄浦江。なぜ申江と言うかというと、昔、あの辺は楚の国だった。楚に春申君という人がいた。戦国四君といって四人の王子が食客三千人を抱えていた。そのうちの一人が春申君。その春申君の春申をとって春申江というんです、しゃれて。それで略して申江と言います。上

海の黄浦江のこと。「憐む可し　今日の申江水我を送りてまた嗚咽の声を為す」しゃれているな、これ。

もし、この人が漢詩の世界に入ったら相当な詩を作り得たと思う。しかし、作る気がなかった。親父に反発していますから、この世界なんか御免こうむると。しかし、ひょっと出てくる。ひょっと出てくると結構手練ですから上手な詩を作っている。彼は明治十二年でありますけれども、さっき言った家庭環境がありますから、その時代が前ですね。彼の漢詩としての環境は少し前。したがって、もし彼が一生懸命作ったら、そうだな、国分青崖とはいかないけれども、それに近づくようなことができたかもわからないですね。文才もあったでしょうからね。これは「れば、たら」ですからあまり意味はないけれども、彼は実際にはこういう詩を作る力があっても発揮しませんでした。

まだ話したいことはたくさんあるんですけど、きょうはこの五人を取り上げることによって、時代によって本人の意識や環境や物が違う。それによって作品を見なければいけないと思うんですね。まだこれ以外にも文人として漢詩を残した人がいるかもしれない。そういうものも発掘して、そしてよく勉強して、その流れをずっとたどっていくということが大事かなと思っています。

ちょっとまとまらないですけれども、今日はこのぐらいで。(拍手)　(文責　三村公二)

## 今年もご期待下さい

### ●初心者入門講座(第九期生)開催

・全六回

第一回　四月九日(木)
第二回　四月二十四日(金)
第三回　五月十四日(木)
第四回　五月二十九日(金)
第五回　六月十一日(木)
第六回　七月九日(木)

・場所　神奈川県近代文学館
・時間　午後一時～四時
・申し込み(先着四十名)

〒215-0017
川崎市麻生区王禅寺西2-19-3
三村　公二宛
電話／FAX　044-965-4950
お知り合いの方を誘って下さい。

### ●春の研修会

第一回　六月三日(水)
第二回　六月九日(火)
第三回　六月二三日(火)

・場所　神奈川県近代文学館
・時間　午後一時～四時
・申し込み
総会開催案内に同封する投稿用紙にて
・締切　五月中旬(開催日により異なる)
多くの方々の参加を期待しています。

## 蔵書ご寄贈再度のお願い！

先の会報で漢詩関連蔵書のご寄贈をお願いし、三月六日のサークル交流会(バトル甲子園)会場でその頒布会を行うと申し上げましたが、バトル甲子園の時は頒布の時間が取れない事が分りましたので予定を変更し、五月の総会の時に実施する事にいたしました。

つきましては会員の皆様方(特にベテランの会員の皆様)のお宅に眠っている漢詩関連蔵書のご寄贈を再度お願い申し上げます。ご寄贈は一冊、二冊でも結構です。荷物が多い場合は着払いでお願いします。尚、本のリストは弊方で作成いたします。

一、ご寄贈頂く本を左記宛に2月末までにお送りください。

〒215-0017
川崎市麻生区王禅寺西2-19-3
三村　公二宛
電話／FAX　044-965-4950

二、頒布は総会の日の午前中に実施いたします。総会のご案内を差し上げる時(四月初)にご寄贈頂いただいた頒布予定の本の全リストとその他詳細をご連絡いたします。

## 二十六年度後半と二十七年度前半のスケジュール
## カレンダーに記入しましょう

### ●サークル交流会(バトル漢詩甲子園)

期　日　平成二十七年三月六日(金)
時　間　午後二時～四時五〇分
場　所　神奈川県近代文学館　二階　大ホール
参加申込　本会報に同封した振込用紙にて申込む
　バトルのみ参加　二〇〇〇円　／バトルと懇親会　五〇〇〇円
懇親会　ポートヒル　横浜　午後五時～六時三〇分

### ●女性の会(新企画)

連盟の女性会員による漢詩鑑賞と懇親の会
期　日　平成二十七年二月三日(火)　第一回会合予定
場　所　神奈川県近代文学館　二階　中会議室

### ●定期理事会

日　時　平成二十七年二月六日(金)　午後一二時三〇分～二時三〇分
場　所　崎陽軒本店
議　題　平成二十六年度事業報告／平成二十七年度活動計画
　役員人事の件／その他

### ●神漢連　総会

日　時　平成二十七年五月二十日(水)　午後二時～
議　題　平成二十六年度事業報告／平成二十七年度活動計画
　役員人事の件／その他
講演会　演題「江戸後期の詩人達」／懇親会(ポートヒル横浜予定)
参加申込　総会案内(四月初旬発送)に同封した振込用紙にて申込む
懇親会費　五〇〇〇円(振込用紙は総会案内に同封)

## 編集後記

甲午(平成二十六年)から乙未(平成二十七年)、午年から未年に変わりました。去年は暴れ馬(午)の如く広島の土石流や木曽御嶽山の噴火など人命に関わる自然災害の多い年でした。未曾有の雪は一月、十二月に降り、山間僻地では生活が脅かされました。今年は羊(未)のイメージのようにおとなしい穏やかな一年であって欲しいと願う。一月四日の朝日新聞の天声人語によると羊は「よきもの」という意味をもち羊にまつわる漢字には「美・善・養・祥」など良い意味の字があると記されていた。

さて新年を迎え各家々には年賀状の束が届けられたことでしょう。新年の恒例の挨拶の他に近況を知らせるカラー写真が添えられた微笑ましい賀状が多かったと思う。最近はパソコンにより容易に写真編集が出来、若者といわず高齢者でも見映えの良いものが作れる昨今である。更に、メール年賀状なるものもあり、パソコンの能力を侮ることは出来ない。

本会報においても同様であり、原稿執筆者各自から寄せられたデジタル原稿はそのままコピペにより本紙欄に載せることができ編集者としてはこの上ない便利な道具となっている。写真も同様であるが紙面の都合上多くを載せられないのが残念である。

上欄の通り諸行事が多く計画されている。会員の方々のご協力により活発な連盟活動としたいものである。

今号より編集に香取和之氏が加わり、今回は川上修己が編集・割付を行いました。

次号は七月三十一日を予定している。

(香取、川上、中島、三村、吉岡)